

平成 21 年 6 月 15 日現在

研究種目：若手研究 B

研究期間：2006～2008

課題番号：18700634

研究課題名（和文） ドイツ ESD 推進プロジェクトの日本での適応可能性に関する研究

研究課題名（英文） Research on adaptive possibility in Japan of German ESD project

研究代表者 諸岡浩子（もろおか ひろこ）

くらしき作陽大学・食文化学部・講師

研究者番号：00412221

研究成果の概要：

ドイツの持続可能性教育（ESD）のモデルプログラムである「BLK-Programm” 21”」と「Transfer-21 Programm」のカリキュラムやプログラム内容を中心に、学校教育における持続可能性教育の在り方について検討した。これらのプログラム自体は、学校教育において展開されているものの、学校と地域、社会との連携によって成り立っていることが分かった。このことは、日本において持続可能性教育を実践するうえで、大変重要な課題である。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,200,000	0	1,200,000
2007 年度	1,300,000	0	1,300,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	3,500,000	300,000	3,800,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：科学教育・教育工学 科学教育

キーワード：環境教育

1. 研究開始当初の背景

1992 年の国連リオ会議以降、ドイツでは環境教育分野で持続可能性の概念が広く浸透した。

教育計画および研究促進のための連邦・各州委員会（Bund-Länder-Kommission für Bildungsplanung und Forschungsförderung: BLK）は、持続可能な社会の構築に向けて、教育政策を整備するためのモデルプログラムを 1999 年に始動させた。

このモデルプロジェクトは、学校教育における持続可能性教育をより実践的なものとするため、ドイツ全土の 200 校が参加し、5 年間の長期プログラムを実施した。「BLK-Programm” 21”」と呼ばれるこのプ

ログラムは、その成果として、56 冊におよぶ指導書を作成した。

2004 年からは、「BLK-Programm ” 21”」の第二期プログラムといえる「Transfer-21 Programm」が約 4000 校の学校を対象に 5 年間の予定で実施されている。

これらのドイツの国家的規模のプログラムは、今後日本で環境教育を推進していく上での大きな手掛かりになることが予測される。

2. 研究の目的

本研究の目的は、わが国の学校教育における持続可能な開発のための教育

（Education for Sustainable

Development: ESD) の促進のため、ドイツが学校教育で展開している持続可能性教育の実践例を日本へ紹介するとともに、日本における持続可能性教育の在り方について検討することである。

そこで、1999年から2004年にかけて行われた「BLK-Programm” 21”」の成果と課題について確認したうえで、2004年から2009年にかけて現在行われている

「Transfer-21 Programm」の現状と方向性についてしらべる。

最終的には、これらの調査から得られた成果などに基づき、わが国の指導方法の研究、教材開発の基礎を構築することを目標とする。

3. 研究の方法

研究方法としてまず始めに、ドイツの「BLK-Programm” 21”」(第一期プロジェクト:1999~2004)と「Transfer-21 Programm」(第二期プロジェクト:2004~2009)について、報告書、出版された資料・教材、関係者へのインタビューにより、これまでの成果、現状と課題、そして今度の方針について確認した。(2006年度)

次に、これらのプロジェクト成果から、わが国の学校教育の現場において、ESD実践が期待できる資料について翻訳・整理を行なった。(2006年度~2008年度)

また、学校教育と生涯教育との関係性を見るため学校教育の入口である幼児教育と、学校教育の出口である職業教育・大学教育における持続可能性の実践を調査した。調査方法は、ドイツでの実践の様子の現地視察、関係者へのヒアリング調査、関係資料や参考文献による文献調査である。(2007年度)

そして、最終的に日本における持続可能性教育を促進するために、学校と地域との連携体制に注目した。具体的な手続きは、まずドイツにおいて、学校と教育関連施設および地域の関連施設の現地視察、関係者へのヒアリング調査を実施した。次に、日本の現状を把握するため、国連大学が推進している教育プロジェクト、RCE (Regional Centers of Expertise on Education for Sustainable Development) にESDに関する地域の拠点のモデル地域として認定された岡山市において、市民を対象としたアンケート調査および、岡山ESDの関係者に対して行ったインタビュー調査の結果から、岡山の現状についてまとめた。(2007年度、2008年度)

4. 研究成果

ドイツの持続可能な開発のための教育 (ESD) の促進のために、国家的プログラムとして学校教育において展開されている「BLK-Programm” 21”」と「Transfer-21 Programm」について、報告書、出版された資料・教材の分析や関係者へのインタビューにより、これまでの成果と課題について検討した。

第一期プロジェクトとして、1999年夏~2004年夏にかけて行なわれた「BLK-Programm” 21”」には、モデル校200校が参加し、56冊に及ぶ様々なテーマの教材が作成された。(図1参照) これらの教材はインターネットから簡単にダウンロードすることができるため、モデル校以外の教師による活用がなされていると考えられる。

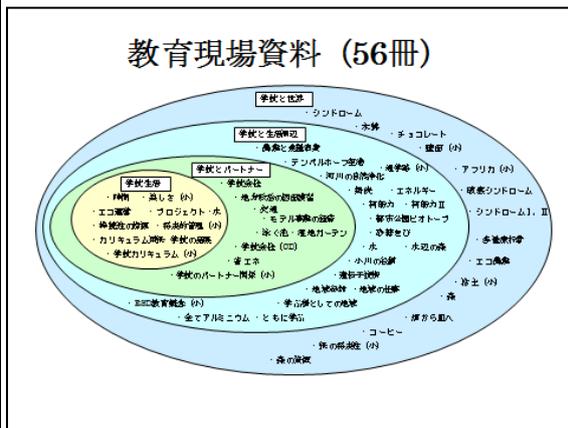


図1 指導資料の分類

また、「BLK-Programm” 21”」の課題として、専門指導者が不足していることから、2005年~2010年に行なわれる第二期プロジェクトの「Transfer-21 Programm」では、Multiplikatorenprogramm(乗法的プログラム)と呼ばれる指導者を養成するための新しいプログラムが実施されている。このMultiplikatorenprogramm(乗法的プログラム)の概要については、日本環境教育学会第17回大会(北海道)にて報告を行った。しかし、このプログラムは、プログラムの実践に携わる機関とプログラム参加者へ時間的、経済的な負担が大きくなることから、その後のドイツでの研究者へのインタビューから明らかとなっており、この点をふまえた上で、日本における持続可能性のための教育推進に向けた効果的なシステムの構築についてさらに検討していく必要がある。

また、ドイツの持続可能教育 (ESD) 促進の国家的学校教育プログラムである「BLK-Programm ” 21”」と「Transfer-21 Programm」は、主に中・高等学校で展開されてきたが、現段階では初等教育レベルへの導入が進んでいる。持続可能性教育は、

学校教育だけでなく、幼児教育、高等教育・職業教育、成人教育のすべての段階で実践されるべきである。幼児教育においては他のEU諸国との連携プログラムが促進されており、幼稚園教諭自身の持続可能性教育への意識の高さを確認した。高等教育・職業教育では教育改革に持続可能性の推進が進められており、様々な大学でその試みが見られる。本研究では、リューネブルグ大学において実践されている「総合的研究」のカリキュラムについて、大学関係者へのインタビューや、大学が出版した書籍からその実態を明らかにし、くらしき作陽大学研究紀要第40巻第1号にまとめた。

本研究では、主に、ドイツの持続可能性教育(ESD)のモデルプログラムである「BLK-Programm 21」と「Transfer-21 Programm」のカリキュラムやプログラム内容を中心に見てきた。これらのプログラム自体は、学校教育において展開されているものの、学校と地域、社会との連携によって成り立っていることが分かった。このことは、日本において持続可能性教育を実践するうえで、大変重要な課題である。

ESDに関する地域の拠点のモデル地域として認定された岡山市において、市民を対象としたアンケート調査および、岡山ESDの関係者に対して行ったインタビュー調査を行った。その結果、岡山市中心部においては、公民館の活用により、学校と地域との連携が活発化されることが示唆された。しかし、地域拠点となる施設や団体は、地域によって異なるため、その地域に応じた施設・団体の活用および、その教育内容についてさらに多くのモデルケースを収集する必要があることが課題として挙げられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①諸岡浩子、「ドイツ高等教育改革における『総合的研究』の在り方ーリューネブルグ大学・持続可能性教育の例ー」、くらしき作陽大学研究紀要、40巻1号、pp. 35-47、2007年、査読無

②諸岡浩子、「学校教育における環境教育授業の日独比較」、くらしき作陽大学研究紀要、41巻1号、pp. 53-67、2008年、査読無

③宮川雅充、井階久喜、諸岡浩子、土生真弘、青山勲、「『持続可能な開発』の認知率

とその関連要因ー岡山市民を対象とした質問紙調査ー」、環境教育、19巻1号、2009年、査読有

[学会発表] (計5件)

①諸岡浩子、「ドイツ「持続可能性のための教育」ー学校教育プログラムTransfer-21の展開ー」、日本環境教育学会第17回大会、2006年8月、酪農学園大学

②諸岡浩子、「ドイツの大学におけるESDの展開ーリューネブルグ大学の取り組みー」、日本環境教育学会第18回大会、2007年5月、鳥取環境大学

③宮川雅充、井階久喜、諸岡浩子、土生真弘、青山勲、「ESDの認知率とその関連要因ー岡山市民を対象とした質問紙調査ー」日本環境教育学会第18回大会、2007年5月、鳥取環境大学

④Hiroko MOROOKA, Masamitsu MIYAKAWA, Hisanobu IKAI, Masahiro HABU, Isao AOYAMA、「Survey of Social Participation by questionnaire of the Citizens in Okayama City, Japan」、第21回国際家政学会議 IFHE100周年記念世界大会、2008年7月、スイス ルツェン

⑤宮川雅充、井階久喜、諸岡浩子、土生真弘、青山勲、「環境配慮行動および社会活動の状況とそれらの関連要因ー子どもの頃の家族交流・自然大変に注目して」日本環境教育学会第19回大会、2008年8月、学習院女子大学

[図書] (計1件)

①諸岡浩子、「ドイツ環境教育の今ー持続可能な社会のための教育ー」、地理月報 No. 504、二宮書店、pp. 3-5、2008年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

諸岡浩子 (もろおか ひろこ)

くらしき作陽大学・食文化学部・講師

研究者番号：00412221

(7) ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計10件)

- ① 学振太郎、半蔵門一郎、学振花子、論文名、掲載誌名、巻、最初と最後の頁、発表年(西暦)、査読の有無
- ② 学振太郎、論文名、掲載誌名、巻、最初と最後の頁、発表年(西暦)、査読の有無
- ③ 学振花子、論文名、掲載誌名、巻、最初と最後の頁、発表年(西暦)、査読の有無

〔学会発表〕(計5件)

- ①
- ②
- ③

〔図書〕(計2件)

- ①
- ②

[産業財産権]

○出願状況 (計□件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計◇件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

http://○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

6. 研究組織

(1) 研究代表者

学振 太郎 (GAKUSHIN TARO)
○○大学・大学院理工学研究科・教授
研究者番号：

(2) 研究分担者

学振 花子 (GAKUSHIN HANAKO)
○○大学・大学院理工学研究科・教授
研究者番号：

学振 次郎 (GAKUSHIN JIRO)
○○大学・大学院理工学研究科・教授
研究者番号：

学振 三郎 (GAKUSHIN SABURO)
○○大学・大学院理工学研究科・教授
研究者番号：

(3) 連携研究者

学振 四郎 (GAKUSHIN SHIRO)
○○大学・大学院理工学研究科・教授
研究者番号：